
目が覚めたら世界が終わってた

flat_flater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めたら世界が終わってた

【Zコード】

Z4343Z

【作者名】

flat_flater

【あらすじ】

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。これは自称魔法使いの恋咲凜音が、ならず者や巨大モンスターの闊歩する町でひつそりと生きていく話**
* ちょいちょい加筆・修正が入ります**

#01 目が覚めたら世界が終わってた（前書き）

阿鼻叫喚のモンスター・パニックと超能力バトルを合わせた感じの小説を書きたかった。

#01 田が覚めたら世界が終わってた

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

とかだったら少しは格好がついたものの、私が田覚めたときは既に世界が終わってた。

*

私の名前は恋咲凜音。れいさきりんね 聖歌学園に通う3年生だ。

ちなみに聖歌学園なんて少し恥ずかしい学校名をしているが、特にこれといって特徴の無い普通の学校だ。が、それじゃ私がつまらないので、生徒会長になつてから「『しきげんよう週間』を作つたことがある。

生徒会役員（女の子）を校門に立たせて、登校してきた生徒に向かつて「『しきげんよう』と挨拶をさせるのだ。

教員連中が少し難色を示したが、校風の革命云々それっぽいことをつらつら話したら、短期間ならという条件付で許可をもらつた。勿論ただの私の趣味だが。

恥ずかしそうに頬を染め「『しきげんよう……』と挨拶をする女の子を見て、一部の男子生徒は涙を浮かべ、更には遅刻常習犯の生徒数名がその週だけは異様に早く登校してきたりと、なんだか思わず副次効果があつたりもした。

勿論、一番喜んでいたのは私だが。

つと話が逸れた。

取り敢えずは私の位置情報の確認だ。まあ、これはGPSを使つまでもない。

朝、起きてからずっと家に閉じこもつてゐるから。

私が住んでいるのはアースクエイク桐ヶ谷といふ学園と駅の丁度中間くらいに位置する小綺麗なマンションの4階の4号室（404号室）だ。ドキッとするような名前のマンションだが、耐震性はしっかりしていいるらしい。

妙にダルイ身体を起こして、入学時に買った黒い目覚まし時計を見てみると、短い針が1-1と1-2の間くらいを指してた。

一瞬焦つたけど、どうせ遅刻なら盛大に遅刻してやれと思ひ直し、インスタントのレモンティーを作つてベランダの扉を開け、カップに口をつけながらいつもの外の景色を眺めた。

晴れ渡る空の下（もと）、人が走つてた。

とこうか絶叫してた。

見える範囲の道路は車で埋め尽くされ、所々で事故が起つてた。

んで、人々の絶叫と車のクラクションをBGMにして、

なんか でっかい鳥みたいのがいっぱい走つてた。

これが30分くらい前。

で、まあ、ここまではいい。

いや、だいぶ良くないけど、取り敢えずはいい。問題はその後だ。

私は驚いた。なんたって、目が覚めたら外が凄いことになつてるんだよ？ いつも冷静を気取つてる私でも流石に少しば驚く。んで、驚いた拍子に手に持つていたカップをベランダの外に落としちやつたわけだ。

勿論、カップは重力に反することなく落ちていくよね？ 具体的には重力と空気抵抗が釣り合つた感じで。ほんの数分前まで、私もそう思つてた。

カップを落とした私は焦つたさ。雑貨屋で2000円も叩いて買った、黒猫柄のおしゃれなやつで、私が今一番氣に入つてゐるカップだつたから。

私はベランダから身を乗り出して落ち往くカップに向かつて手を伸ばし、そして叫んだ。

「逝くなーッ！」

私は自分の物は大切にするから、小さなものでも一つ一つがもの凄く大事なわけだ。

しかし、流石の私でも物理法則に抗あらがうには10年ほど早かつた。

カップはシャンツ！ と音をたてて、地面に吸い込まれた。私は泣いた。

泣いて、泣いて、涙にぼやける両目で、遠くに見える黒猫カップの亡骸をぼんやりと眺めてた。

その時だ、壊れたカップが、まるで天に召されるかのよつて宙に浮き、私の前まで飛び上がってきた。

最初は夢かと思った。私の淡い幻想が起こした幻かとも。でも、違つた。

それは物理法則を一切無視するかのごとく、宙に浮いたまま動かな

い。

レモンティーの雲を纏つた細やかな破片が、太陽の光を反射してキラキラと光る様子に私は目を奪われた。
しかしそれだけじゃあ、あんまり面白くない。もつといづれ、ぐるぐると回る銀河みたいな感じで。

と、思つてたら、カップの破片たちがなんかこいつ、銀河がぐるぐる回る感じで回転しました。

マジで？ と思って、こんどは止まれつと念じてみた。瞬間、空中をぐるぐると回っていたカップの破片たちがピタリと静止した。

10年なんてもんじやなかつた。

どうやら私には物理法則を凌駕する力があるらしい。

*

と、いうのが今までの出来事の一連の流れ。

外に出るのは危ないらしいので今は自宅待機だ。
んで、昔バードウォッキング用に買った双眼鏡を構え、文字通りバードウォッキングをしている。
でつかい二ワトリだ。

大きさがはんぱないことと、人間を食べることを除いたら。

二ワトリのあのカクカクとした動きは割りと可愛いと思つていたけど、撤回だコレ。

2メートル近い二ワトリにやられたら軽く恐怖だった。
注意してみると、その太い嘴で自動車の窓ガラスを貫いている。

そして慌てて出てきた人を、更に一突き しようとしましたところ

私が放つた高速の弾丸が急所である眼球へと突き刺さる。

ピギヤー！ と悲鳴をあげてよろめくワード。

間一髪で難を逃れたサラリーマンの中年おやじが悲鳴をあげながら逃げていく。

「よしぃ」

私は口に含んだいくつかのマーブルチョコを噉み砕き、笑った。

今、私の頭の上で色とりどりのマーブルチョコが円環を描きながら浮いている。

最初は一つずつ宙に浮かせる練習をしてたんだけど、一つ、一つと増やしていくうちに一箱、二箱になって、今は多分四箱分くらいになっていると思つ。ちなみになんでマーブルチョコかというと単にあの綺麗な配色と形が気に入ってるからだ、あと美味しいし。

私は頭上で回るマーブルチョコのうち一つを自分の口内へと誘導した。

うん、やっぱり美味しい。

よもや私の人生で手を全く使わずにマーブルチョコを食べる日がこようとは、いったい誰が想像できようか。

これこそが私の第一の魔法、虹色の円環である！ ちなみに今、命名した。

うん、即決にしてはカッコいいんじゃない？ マーブルってなにか知らないけど。

とにかく、騒ぎが一段落するまではここで高みの人助けを決め込もうと思います。

#02 現状を確認しよう

『 総理は今回の報告を受け、警察の手には余るとの判断を下し一刻も早い自衛隊の出動を 』

*

あれから一時間が経過した。

今まで4階のベランダから下を見下ろしながら、二ワトリから逃げる人を助けてたんだけど、みんなそれぞれ避難したのか見える範囲で確認できるものといつたら、穴を穿たれ捨て置かれた車、小火を起こしたのか煙をあげている民家、散乱したガラス……そして、逃げ遅れた人々の死体と、それを貪る二ワトリ型のバケモノ。

どれもこれも思わず目を背けたくなるような光景ばかり、私が数時間前まで住んでいた世界は形を変え、全くの違つものへと変貌していた。

流石の私も結構疲れた。

なにか知らないけど、魔法を使つたびに精神的な何かが削られていくような感じがするのだ。

最初は何も感じなかつたんだけど、30分、40分と時間が経つほどそれが顕著に感じられるようになってきた。

私はその削られていく何かを、仮に魔力と呼んでいる。

あえて言うが、これは超能力なんかじゃ断じてない。魔法だ。
そっちの方がなんか、ロマンがある。

ところで、情報化社会である今日、家にいながらにして国内だけでなく世界各地の情報を手軽に集めることができる。

そして、同じ数時間のニュースは大きく三つに分けることが可能だ。

一つは、知つてのとおりバケモノの襲来。

ただこれは二ワトリだけに留まらないらしく、かなり色々な種類がいるらしい。バイオテロによる元来の動物の突然変異という見方が一般的だが、現実味はない。なにせ、世界中で同時に発生してゐるわけだから。

二つ目は、超能力者(せいきうぢうしゃ)が出現したこと。

これもここ数時間でかなりの数が観測されているらしい、ネットでは賛否両論な感じで騒がれてる。つまり否定派の意見として、ヤラセじゃね？とか、非科学的だ、とか。

何時間か前の私なら同じように否定したかもしぬないが、この情報は確実だと思う。ソースは私。

最後、三つ目は奇病の話。

これも、ここ数時間の間に起きており、そして最もたちが悪い。簡単に説明すると、この病気に罹ると少しずつ身体が弱っていき意識を失う。そしてその後、身体がまるで水晶のように結晶化するらしい。

原因は不明で致死率100パーセントの難病だ。

年齢が10～20代にはほぼ影響(かか)がなく、患者はそれ以外の年齢層がほとんど、という噂(うわさ)もあるけど、確証は無い。ど。

「ふう……」

私は開いたいくつかのサイトを閉じ、メモ帳に書いた文章を保存する。

「えと、ファイル名、ファイル名……『プリントが食べたい ·txt』

……ヒンターッ！ よし、できたつー！」

私はノートパソコンを閉じ、立ち上ると現在は閉め切っているカーテンを少しだけずらし、外の様子を垣間見た。

「いやあ、だいぶひどくなつてきたなあ…………」

先ほど調べて、バケモノには色々な種類がいると言つたが、そのとおりだ。

實際外をチラリと見ただけで数十の鳥が我が物顔で空を舞つてゐる。勿論ただの鳥じゃない。なんていうか、プレラノドン級のやつだ。全身真っ黒な羽毛に包まれているため、おそらくもとはカラスだつたんだと思つ。超怖い。

安易に外へ繰り出して、ぱへつとやられたのは嫌なのでしばりくは家に引きこもるつと思つ。

魔法を使つすきて身体もダルイ。

「シャワーでも浴びよつ……」

正直、この状況でいつまで電氣や水が使えるか、分かつたものじやない。

今のうちに贅沢の限りをつくしておけ。まあ、たいした贅沢は望めないんだけど。

*

お風呂のお湯を魔法で動かしたりして遊んでいたら、余計身体が

ダルくなつた。

でもおかげで不定形なものを操るのはかなり難しいと言つことが分

かつた。今度から魔法の練習は水でしよう。

お風呂からあがった私は、まず、これから引きこもり生活のために必要不可欠な食料を確認することにした。

とにかくまずは水から。なんたって人間、水だけでも何週間かは余裕だとかどつかで聞いたことがある。

私は部屋の片隅に押しやっていた大きく膨らんだゴミ袋を引っ張り出す。それにはごみに出すために大量に溜め込んでいたペットボトルが大小約二十個ほどが入っていた。

さて、今からこれ全部に水を入れていく作業に入る！

「うう、終わつたあ」

ひとつひとつはたいしたことは無くともこれだけの量の水を長時間ペットボトルに入れ続けるのは大変な重労働だつた。

私はかじかむ両手をさすりながら満タンになつたペットボトルを満足げに見下ろす。

これで、しばらくは大丈夫だらう。

よし、次は、食べ物だ。

私は冷蔵庫を開けた。

が、一人暮らしの冷蔵庫なんてたいしたものは入つてない。数種の野菜と冷凍された肉類、といったところだ。

米も先日ほぼ使い切つてしまつたためあと一合あるかないかといつたところ。

私は他にもめぼしいものがないかと部屋中を探した。

15分後、他に見つかったのは、インスタントラーメンが3個。以

上。

すくなつ！

なにこれ！？ こんな装備で私にどうじるといー？
やばい、私、しばらくは本格的に水だけで生活することになるかも
しれない。くそぅ、もつと非常食とかいっぽに買い込んでくんだつ
た……。

まあ、こればかりは仕方がないとあきらめるしかないか。

#03 外に出てみよう

世界が終わつたのが5日前。
水道が止まつたのが3日前。
食料が底をついたのが2日前。
電気が止まつたのが1日前。

私の我慢の限界が来たのが5分前のことである。

*

「うわあああ-----！　おーなーかーすーいーた-----！」

一日も何も食べてない。
と、いうか、2日目にしてインスタントラーメンを食べきつたのが
悪かったのかもしねない。
デリバリーでピザでも頼もうかと思つて、電話してみたけど全く
ながらない、ちくしょう。

残っているのは、マーブルチョコが一つ。

サバイバルにはよくチョコレートと聞くけど、あいにくこれだけじ
や全くお腹が膨れない。早急に食料を調達する必要があるだらう。

私はカーテンの隙間から外を覗いた。
数は少なくなつていたが、まだいる。黒い羽毛に包まれたカラスの
バケモノだ。

ふいに、電信柱の頂点に止まっていたソレと皿が合つた気がして、

慌ててカーテンを閉めた。

私はベッドに倒れこみ、魔法でマーブルチョコを一粒口内に移動させ、力チカチと音をたてて動く掛け時計の針を眺めながらこれからのことを見案した。

食料も無い、水ももう少しで尽きる、電気も無い。

そんな家にいつまでも引きこもっていてもいざれ餓死するのは明白だ。

それなら、まだ身体が元気なうちに思い切って外に出てみるほうが得策かもしね。

いや、絶対にそれがいい、うん、そうしよう。

私は、ガバッとベッドから身体を起こし、服の入ったクローゼットを漁つた。

戦闘に備えて出来るだけ動きやすい服を選んでいく。

膝丈のハーフパンツとレギンス、黒の長袖インナー、最低限必要なものをいれた小さめの皮のショルダーバッグを背負い、その上からスponとポンチヨを被つた。

今年の冬は冷えるとのことだが、余分な厚着は動きを制限するし、第一私自身寒さには強いのでこんなものでいいのだ。

靴も動きやすさを重視したスニーカーだ。

私は玄関に座り込み、靴紐をきつく締め終えると、自分の家の玄関を6日ぶりに開けはなつた。

*

開けた瞬間、血の匂いが冷気に乗つて私に押し寄せてきた。
久しぶりの外の匂いは随分と変わつており、私は眉を顰めた。ひそ

「早くしないと」

第一の田標は食料の調達、後は現状の詳しい情報が知りたい。

私は無意識にエレベーターへ乗るつもりするが電気が止まっているのを思い出して、階段へと向かった。

出来るだけ足音を立てないように、ゆっくりと階段を下り、遂にマンションの外へと出た。

空を見上げると大きな鳥が獲物を探るように旋回しているため、容易に飛び出したら普通ならその時点でぱくりだらり。が、そこは私が、そこは私。

忘れていると思うが、私は魔法を使える。

しかも、この5日間それを使いこなす練習を積んできたのだ。大丈夫、いける。

私はポケットからビー球を一つ取り出し、田の前に浮かせ旋回する鳥に向け照準を合わせ、射出した。

初速から、最高速度で発射されたビー球は凶弾となり、悠然と空を飛んでいた巨大な鳥の身体にのめりこんだ。

「ギャアーーーー！」

と何が起こったのか分からぬといった様子で痛みにもがきながらも墜落はせずに、他所へと飛び去っていく。

「硬いなあ、やっぱり威力が足りない、弾も使い捨てだし節約しないと

まあ、その辺の石をぶつけてもいいわけだけど、それは私の趣味に反するため却下だ。

もつともやうならなによつに弾はそれなりに用意した。

が、少なくとも今の私じゃ、一匹を倒すのにもかなり苦戦を強いられそうだ。

私は膨らんだポケットに手を突っ込みながら、歩みを進めた。

食料調達のために立ち寄ったコンビニ数件は、ほとんどが荒らされ、食料という食料がなくなっていた。

人間の仕業か、バケモノの仕業か分からぬがこうなつたら少し離れたショッピングモールまで行くしかなさそうだ。

ため息をついて、本田5件田のコンビニを発とうと開け放しの自動ドアから外に出た。

と、その時、「キャア————！」と女性の甲高い悲鳴が響き渡たり、その悲鳴の聞こえた方角から、数名の学生と思われる集団が走ってきた。

と、いうか私の学校の生徒だった。久しぶりに人間を見た気がする。しかしその顔は皆恐怖に染まつており、私の存在など見えていないようだつた。

そして口々に叫ぶ。

「やばいよ！　早く、早く逃げないと……」

「嫌だ！　死にたくないつ……！」

「だ、大丈夫よ！　あの役立たずもこれでやつと役に立つたんじやない！？」

「しかたがなかつたんだ！！　許してくれつ……！」

私は直ぐに理解した。

誰かを囮として使つたことを。

私は逃げる女子生徒の服を掴んで強引に引き寄せた。
そして顔を思いつきり近づけ問いただす。

「どこの…！」

「ひつ…？　え？　か、会長…？　なんで…？…！」

女子生徒は自分の学校の生徒会長の姿を見て驚いているようだが、
こちらにそんな暇は無い。

「いいから教えなさい…！　置いてきた人はどこのいるの…？…！」

私の剣幕に押されたのか、女子生徒は泣きながら答えた。

「あ、あの、曲がり、か、角の向こう、ですっ」

私はそれを聞くと女子生徒を解放し、彼女が指差した方向に向かつて全速力で駆けていった。

#04 戦つてみよ

私の魔法はかなり便利で使い勝手もいいのだが、一つ欠点が存在する。

それは内側にほとんど作用しないこと。

つまりは、自分自身を浮かび上がらせることが非常に困難であることだ。

外側への干渉はそれなりに使いこなせるだけに、何で？　といったのが本当のところだが、こればかりは謎である。

*

住宅街を走り抜け、女子生徒が指差した曲がり角を曲がる頃には、私は肩で息をするほどに疲れきっていた。文化系なめるな。

しかし、全力疾走しただけのことはあつたらしい。

一人の女子生徒が、アスファルトの地面にへたり込み一匹のバケモノに追い詰められていた。

幸い大きな怪我は負つてないようだ。

バケモノの方は……やつぱりそうきたか、という感じだった。

茶黒い体毛に鋭く尖った爪、ピンと伸びた耳、涎を滴よだれしたたらせ大きな牙を覗かせる口。

犬、とは生ぬるい表現だった。

そのライオンを一周りほども大きくしたようなワンコは女子生徒を壙いの方へと追い詰め、ゆっくりと距離を縮めている。

私はポケットからビー玉を一つ取り出し、ワンコに向かって思いつき投擲した。

物理法則に従い放物線運動を描き飛んでいたそれは、途中、第一の法則により急加速する。

目にも留まらないスピードで、私の放った弾丸はワンコの身体に吸い込まれた。

ワンコが突然の刺激に驚き、巨体のわりに随分と俊敏な動きでその場から飛びのき私の方へと身体を転換し、低いうなり声をあげる。

あれ？ もしかして、全然効いてない？

そう思い私が第一投を撃とうと、ポケットに入った無数のビー玉を一掴みしたところだつた。

うなり声をあげながら様子見をしていたワンコが、地を蹴り、私の距離を一気に詰めてきた。

「ちよ！ はや！」

焦つた私は、手に握ったビー玉を地面に落としてしまつ。口口口とゆるい傾斜を転がっていく無数のビー玉。

「くづ…」

私は手に残つた一つのビー玉を、今なお涎を振りまきながら接近していく躙^{しつけ}のなつていないワンコに向かつて射出した。

ノーモーションかつ高速で飛来するビー玉を初見で避けるのは難しい。

ビー玉は私の狙い通り、ワンコの額部^{ひたい}に突き刺さつた。

しかしワンコは衝撃に一瞬よろめくも、頭を数回左右に振ると、白濁した瞳で私を睨みつけ、警戒するような動きで私から距離をとる。

予想以上に硬い！ 多分鳥の数段上だ。

おそれく私の攻撃は毛皮に阻まれて、肉体にはほとんど届いてないだろう。このままじゃ、何度やつてもこいつを倒すのは不可能な気がする。

さて、どうしよう。

私は、残ったビー玉をポケットの中**弄びながら**、ワンドの背後に見える女子生徒を見た。

気を失っているようで、塀にもたれかかり目を開じている。

「これは、逃げるわけにもいかないか……」

私はポンチョを脱ぎ、身軽になると、残ったビー玉を取り出し自分

の頭上へと誘導、そして半自動的な円環運動をイメージした。

虹色の円環オート・マーブルと、その場のテンションでちょっとアレな名前をつけたこの魔法は、決してただのかつこつけだけものではない。実際私はここ五日間、部屋にこもって魔法の練習と検証ばかりをやっていたのだ。わざ

この魔法は多少のリスクも背負つが、その分メリットもある。

唯一にして最大のリスクが、常時の魔力消費による疲労度が大きいことだ。

しかし、それを除けばメリットはかなり大きいと言える。

まず最初に、半自動での円環運動をイメージしたことにより、余程のことがない限り武器が自身から離れることがないということ。更にこれは、いちいち意識を向けなくても最初にイメージをしてしまえばあとは勝手に運動してくれるので、戦闘に非常に向いていると言える。

第一に、インターバルゼロでの連射が可能だということ。

集中して一撃一撃を放つのは違ひ、これは少しだけ意識を向けるだけで弾が円環運動の軌道を離れ、私の意図した方向へ飛んでいく。そして多少だが威力が上がる。

「さて、さくっと勝負を決めないと」

私がこの状態で戦えるのは、実践だと30分持てばいいほうだとと思う。

これからのことを考えると力は温存しておきたい。

私は頭上で回転する無数のビー玉に意識を向けた。
ヒュ、ヒュ、ヒュ、と小さなそして鋭利な音をたて、3つのビー玉が連続で発射される。

しかしワンドの両手を狙つた私の攻撃は機敏な動きによつて悉く回避された。

内、二つはワンドの胴体部分に命中したが、どうせ大したダメージは無いはず。

そのうちワンドは私が大した脅威ではないと確信したのか、再度私に襲い掛かってきた。

刃物のような牙が私に迫る。

車のような速さで迫り来る巨体に、ちまちまとした攻撃は意味がない。

「ああ、もうっ！ 全部行け！！」

私は迫るワンドに向か、全弾を発射した。

#05 'J' 美を堪能しよう

私が苦し紛れに放つた弾幕は螺旋軌道を描きながらワンコに襲い掛かる。

「デジデジデジデジ…」と、鈍く重い音の連續。ワンコの表情が歪んだ。

そして、その内の一発がワンコの左目に命中する。

「ガアアアアーー！」

やつた！ そう思ったその時、苦しみにもがくワンコの前足が私に振り下ろされ、その爪が私の太股をザッククリと切り裂いた。ぶしゃり、と鮮血が舞う。

綺麗だな。

最初は自分の太股から吹き出る血しぶきをまるで人事のように観察していたが、時間がたつごとに患部が熱を持つてくるのを感じた。そして数秒後、それを自覚する。

今まで感じたこともない、常に身体を何かで抉^{えぐ}られ続けているような激痛が私を襲った。

「あ、あ、あーーー！ ぐう、い、いた……」

私は激痛に耐えながら、目の前で暴れるワンコから距離を取ろうとするが、切り裂かれた左足が言うことを聞いてくれない。切り裂かれた左太股を見るとパッククリと皮膚が捲くれ、ピンク色の肉が見え隠れしている。

出血もひどいし、このままでは血の流しすぎで死ぬ！

私は無作為に振り下ろされる凶刃を地を転がるようにして避ける。動くたびに感じる激痛を我慢しなんとか反撃しようと、転がつてゐる小石類を魔法でぶつけようとするも、集中力が散漫になり上手く操ることができない。

やけくそ気味にワンコに放った小石類はほとんどが意図した方向とは違つ方へと進み、ワンコのほうは当たりうが、当たるまいが関係ないどばかりに私に迫つてくる。

「もう！　しつこい！」

背負つていたショルダーバッグをワンコへ投げつけるも、中身を散らばらせるのみでただワンコを興奮させただけのようだつた。ワンコの怒り狂つた攻撃が続く。

いくりワンコが痛みに錯乱していて攻撃が単調だつたとしても、足に怪我を負つた私では避け続けるのにも限界がある。四撃目を避けた時には私の体力は限界に來ていた。

そして五撃目、私の頭を喰いちぎる氣な^{あきと}か開かれた顎、そして凶暴に尖つた牙が私に襲い掛かってきた。

左足の激痛に朦朧としながらも、私は起死回生の一撃を放つため周囲の武器になりそうな物を探した。

「ロロンシ。

と、私の目に最初に飛び込んできたのは、鈍い光を発して輝く野球ボール程の大きさの石。

ああ、そういうればこれも持つてきただつた。

おそらく、先ほどショルダーバッグを投げつけたときに中からこぼれ落ちたのだろう。

私は、フツと笑みを浮かべる。

「……頼むよ?」

薄れゆく意識の中で放ったその石は眩しい輝きと共に私の手を離れるやいなや、ワンコの身体を一直線に食い破つた。混沌する意識の中でその様子を見届ける。

そして、ブツリと意識が途切れた。

*

「んぱい きてください」

身体を揺さぶられる。

深い眠りに誘うよくな優しい振動。

「ないでぐだせー」

ああ、やけに心地のいい感触だ。
それになんだかいにおいが……。
あ、そういうば私死んだんだつけ。
だつたらこのかわいい声は天使かな。

「せ、んぱいっー めえ、あげてぐだ、ぐだせーー。」

と、女の子の悲痛な泣き声と共に、私の意識が完全に覚醒する。

まず田に飛び込んできたのは、適度な大きさに膨らんだ世界で最も

美しい双丘。

「どうやら私は女の子に抱きかかえられたようだ、けどまだ顔を胸につづめている状況らしかった。」

彼女はまだ私が田を覚ましたことに気づいていないようで、私をぎゅっと抱きしめながらすり泣いている。

なので、仕方が無いのでもう少しの状況を堪能する」としてみつと思つ。

顔を、柔らかくいにっこりおこのする胸へとひくわる。
クンクン、あ~いいにお~いだ~。

ほお擦りほお擦り、と。

「ん……あ、せ、んぱい？」

スンスン、スンスン。

あ~、たまらん、ずっといじりたい。
もう私は絶対離れないと。
そうだ、これは対価だ。私がんばったし、少しくらい褒美あつてもいいよね。

うん、これは神様からの私への高い褒美に違いない。

は~、柔らかくともち~な~。

モリモリ。

「あ~、んあ、や、ん……せ、んぱあい」

「つ、せ、胸にほお擦りほお擦り。

から~の~、モリモリ。

「あ……せん、ぱい、やあ、ん、だ、ダメえーーー！」

「ぐはーーー！」

「あーーー、めんなさいーーー！ 大丈夫ですかーーー？」

はつーーー！ あまりの嬉しい状況に少しばかり混乱していたようだ。
心配そうに私を覗き込む女の子を見上げる。

制服は泥だらけで、スカートなども所々が破れている。
リボンの色は青なので一年生なのだろう。

目に付くのが、肩まで伸ばしたサラサラの黒髪。

この娘を含め私も通う聖歌学園という学校は校風も比較的ゆるく、茶髪もやり過ぎない程度になら許容されているため、このような黒髪はわりと珍しかつたりする。まあ私も生まれてこのかた髪を染めたことは一度も無いのだけど。ナチュラルで未加工なままである。

身長はあまり高くはないようだが、出でるところは出でているみたい。
まあ、これは私がさつきまで堪能していたわけだが。

それと顔のほうは、これはもう可愛いと一言で表すしかない。
化粧はしてないよう見えるが、もどがいいのかスッピンでもそこの変に化粧した女よりも断然可愛い。

少々たれ目で、優しそうな雰囲気を持っているのもポイントが高い。

と、いうか、なんだか顔もほんのり赤くなつて、息遣いも……ジユルリ。

「あの、せ、せんぱい？ 大丈夫ですか？」

はつ！

「あ、ああ、うん、大丈夫、もつ大丈夫よ、ちょっと混乱してたみたい、「めんね？」

「あ……いえ、う、私は別に……」頬をほんのりと染める女の子。
マジ可愛い。

さて、と。私もそろそろ起き上がるとするか。

そう思い立ち上がろうとしたとき

「つて、あれ？」

私は妙な違和感に気づくのだった。

#06 疑問を抱いてみよ。

なんというか、普通に起き上がることにに対する強い違和感が……。

なんだつけ？　えへと……私は確かワンコと戦つて、足を怪我して、
んで負けそうになつ

……私、左足怪我してなかつたつけ？

*

引き裂かれたハーフパンツとレギンスの下に見える太股は血はつ
いているものの、怪我の痕跡が全く見当たらなかつた。

今気づいた、妙な違和感はそれだ。
あれだけの怪我が自然に治るわけがないし、そういうば痛みどいら
か疲れすらないような……。
え？ ワンコと激闘を繰り広げたのって私の夢？

私はバツと後ろを振り向くと、私が倒した（ような気がする）ワ
ンコの巨体を探す。

と、すぐ隣にぐつたりと横たわる茶黒い毛皮を発見した。

探すまでもなかつた。
めっちゃ伏せしてゐる。

え、でも夢じやなかつたつてことは……。

「あ、あの、せんぱい」

私がウンウンと唸つていると、女の子が心配そうな表情で私の上着の禍をつまみ、と弱々しく引っ張ってきた。

「うん？　どうしたの？」

何氣なく私のツボをついてくる仕草に対し心の中で身悶えしながら、私は微笑みを浮かべた。

生徒会長選挙のために覚えた、私の持てる限りで最上の笑顔だ。それに対し女子生徒はほんのり赤かつた頬を更に紅潮させながらしどろもどろに言った。

「えっと、そ、その、か、身体のほうは大丈夫ですか？　う、私、いっぱい血が出てたからどうしたらいいか分からなくて、せんぱいの服少しだけ破いちやいました。その、ごめんなさいっ！」

私は、女子生徒の突然の謝罪に一瞬困惑する。

「どうか、え？　服？」

いや、確かに全力で破れていればいるけど、これは99パーセントあのワンコが悪いし……？

「あの、ちょっとといいかな？」

「は、はいっ」

いや、そんなに怯えなくても……まあ、いいんだけど。

「大丈夫、怒つてないよ。それよりさつき、血が出てたからって言

つたよね？」

「は、はいっ」「

「間違いない？」

「は、はいっ、間違ないです……あの、それで……」

ふむ、なるほどね。

これは、あれだ、今流行の魔法ブームだ。
おそらくこの娘もその波に乗っている感じなのだろう。
で、その力で私の怪我を治してくれた、とそういうことだらう、多
分。

「うん、君が怪我を治してくれたんでしょ？ ありがとう」「

「あ、あの、何も聞かないんですか？ 怪我のこと……」「

「うーん、なんとなく予想がつくからね」

私はそう言って地面にかがみこむと、転がっていたビー玉を一つ
拾った。

そして、おもむろに宙へ浮かべ、びっくりした顔をしている女の子
の周りをゆらゆらと浮遊させた。

女の子の視線はビー玉に合させ左右を行ったりきたりしている。
私はクスリと笑みを浮かべた。

「多分君もこんな感じの力が使えるんじゃないかな？」

「えと、よ、よく分からないです。パアって傷口が光って、そした

「う……」

うん、多分間違いない。これは回復系かな。
しかし、魔法を使える人って実はいっぱいいるのだろうか。

「そつか、とりあえずありがとう」

「い、いえ、それよりそれ……」

「ああ、これ？」

私は浮遊させていたビー玉を女の子の前にゆっくりと落としていった。
女の子がそれを不思議そうに見ながら両手で受け止める。

「ちょっとした魔法……とにかく場所を変えよつか。ずっとこんな道路の真ん中にいたら危険だしね」

「はい、分かりました」

さて、まずは散らばった荷物を拾わないと、つこでにまだ使える
弾丸も拾つて、と。

ワンコの周りには無数のビー玉が転がっており、私はそれらを一つ一つ拾い集めていく。

うーん、結構集まつたな。

私はビー玉を集めたポケットをジャラジャラと鳴らしながら、取り残しがないか軽くあたりを見回した。

「お？」

と、ワンコの身体の下で何かがキラリと光ったような気がして、ためしにワンコの側でかがみこんでそこを調べてみた。よく見ると、ワンコの身体で陰になるようにして淡い光を放つ小さな宝石のようなものがある。

拾い上げて明るいところで見てみると、太陽の光を反射してキラキラと輝いた。

「それ、なんですか？」

「うーん、なんだろうね？」

そういうえば、と思い立ち私はあるものを探す。

私が最後にワンコに放つたあの石。今拾つたものはそれに良く似ていたのだ。

もともとあの石は、初日、私がベランダから二ワトロを狙撃していた時に発見したものだ。

はじめの方はチョコを飛ばしたりして半分遊んでいたのだが、途中からはもっと硬いものをと何故か溜め込んでいたビー玉を使いだした。

二ワトロは比較的防御力が低いようで、ビー玉での攻撃を何十発か命中させるだけで倒れた。

その時に、その倒れた二ワトロの近くに転がっていたのがあの石だ。

ビー玉とも違うような、太陽の光を受けきらめくその石に対し私はどこか不思議な力を感じ、魔法を使って今まで引き寄せ、ずっと部屋に保管していた。

そして、今日外へ出る際になんとなくそれを手に取りショルダーバ

ツグの中に入れておいたというわけだ。

まさか、それが私の命を救うことになるとは思わなかつたが。

目的のものは、ワンコから一〇メートルほど離れたところで見つかつた。

しかし、それは全体にひびが入つておりもともとの淡い輝きを綺麗に失つてあり、前みたいに不思議な力を感じることもない。

私は、一応それも拾い上げポケットに入れると、ゆうくじと息を吐はいた。

彼女の名前は白水蓮しらみずれんといつらしこ。

「この名前だね」と言つたら照れながら笑つてた。

*

「り、凛音ちゃん……」

「ん、どうしたの？ 蓮」

互いに自己紹介をしてから私は彼女を前に呼び合ひはじめた。

ところのも、当初私が白さんと呼んだときに、彼女自身から名前で呼んでほしいと頼まれたのだ。

それで、だつたらということで、私のことも名前でいいよ。と言つたわけだ。

最初は、せんぱこを名前で呼ぶなんて無理ですよ、と言つていたのだが私が懇願すると折ってくれた。

凛音さんとか凛さんとか候補としてはあつたのだが、前者はどこが固すぎるし、後者は、なんだか、薬品みたいだし。

なのでいつそのことちゃん付けをしてもらひました。

これはこれで新鮮味があつていい感じだ。

まだ私の名前を呼ぶときには少し言葉に詰まるのだが、それはそれでいい感じだ。

「や、やっぱり、あかんよ……」

「大丈夫、大丈夫、ちゃんとお金は払つから」

「せやけど……」

それと蓮の口調だが、別に私が京都弁萌えなわけではない。いや、否定はしないが強要してるとかじゃない。

私が、せっかくだし敬語も外してみて？ とお願いした時必要以上にも「こも」としていたため、なんで？ と聞いてみたら、京都育ちなので方言が恥ずかしいとのこと。

京都弁のことによくない思い出があるのだらつか、少し陰のある笑顔で笑っていた。

なので、蓮の頭をなでなでしながら、話しやすい口調でいいんだよ。と優しく笑いかけながら言つてみた。決してただ撫でてみたかったからじゃない。

「凛音ちゃん……おおきに」と、少し涙目で言つ蓮に理性がちょっと危なかつたのは秘密だ。

ちなみに私は現在、お店にある長持ちしそうな食料を黙々と袋に詰めているところだ。

ワンコと戦った場所から歩いて約一十程度のところにあるそれなりに大きなショッピングモール、その食料品売り場に私たちはいた。電気が止まっているため全体的に薄暗く、やっぱり人の姿も見えない。

道中、何度もバケモノの類に遭遇しそうになつたが、なんとか襲われることなくここまでたどり着いた。

電柱におしつこをしていた、私が戦つたやつよりも一回り大きいワ

「」と目が合ったときは心臓が止まるかとも思ったが、出すものを出すと私たちのことを無視してどこかへ歩いていった。

「え~と、缶詰、缶詰、うわあ全然ない」

チヨコ類、カツブメン類、缶詰類など、日持ちのしそうな食べ物を探しているのだが、なかなか収穫がない。

多分私と同じような考えの人が他にも大勢いたのだろう。しかし缶詰コーナーに関しては、それなりに残っているほうだった。

え~と、どれどれ。

ひよこ豆、インゲン豆、ソラマメ……お、ミックスピースってのもある、あ、こいつはグリーンピースだ。

.....。

「凛音ちゃん、こ、これほんびんやね！」

私が落ち込んでいると、蓮が私を心配そうに見ながら、缶詰を一つ持ってきた。

もも缶だった。

「蓮つー！」

力の限り抱きしめる。

「わー、えっと、ダメやつた？ そこそこ落ちてたんやけど……」

「うん最高！ 偉い！ 可愛い！ 結婚しよう。」

「う、凛音ちゃん、女の子同士で結婚はできひんよー？」

やうやつと蓮とじやれ合つてこたとき、ふと私は背後になにかの気配を感じた。

蓮を守るためにして、戦闘態勢を整える。

「だれー？」

私はポケットに手を突っ込み、弾丸^{ペーパー}を握り締めながら空虚な空間に向かって叫んだ。

すると、ガサリと音をたて、一人の男が姿を表したかと思つと、それに続いて男の仲間と思わしき連中が続々と現れる。皆一様にいやらしい笑みを浮かべており、何を考えているのかは大体想像がついた。

「う、凛音、ちゃん」

怯えた蓮が私の背中^{こぎゅう}と抱きついてくる。が、残念なことに轟^{クラク}と轟^{クラク}の瞬間^{ハヤヒヤ}だ。

男達が口々に叫ぶ。

「やべマジ上玉じやん」

「つか怯えてんし、かあーわいーーー。」

「やあやせませまつーーーばーか！ も前の顔がーえーからだらーー。」

「そこの君、隠れてないでお兄さん達とこー」としない？」

「なに？ む前ああいつの趣味だつけ？ 僕的には手前なんだけど

「まー、ぶつちゅけ、やれればだれでもいいってゆーか？」

「バスには全く容赦しないくせしてよく言つよな！」

あー、これは私が最も係わり合いになりたくない類の人種だわ。
なんだ、この見るからに不良です。みたいな格好と口調。
もうちょっと個性だしていいとか思わないのかな、毎回不思議に
思うんだけども。

私は左手を蓮の震える手に伸ばし安心させるように握り締める。
小声で大丈夫だからと囁き、男達を睨みつけた。

「私たちに向か用？」

感情を殺し、できるだけ相手を刺激しないような言葉を選ぶ。
こうこう手合いは下手なことを言つと意味なく逆上する。
穩便に済むのならそれが一番なのだ。

「おい、聞いたかつ？！ 何か用？ だとよー！」

「おいおーい？ そりゃ俺たちのセリフじゃね？」

「そーそー、つか何勝手に俺たちのもん持ち出さつとしてるわけ？」「.

む、言葉を間違えたか。

「私たちに何かごようかしら」のほうが淑女っぽくてよかつたかな？ いや関係ないか。

私が思案していると、

「おい、聞いてんのか！？ いいから盗ったモン出せって書いてんのー！」

「ばかお前、あんま怖がらせんなよ、ただでさえ顔こえーんだから」

「いーんだよ、じつせにあとで散々悦ぶことになるんだから」

あ〜、いかん、頭が痛くなってきた。

「う、何人かに次々と話されると頭が混乱するんだよね。」

言つてることは意味不明だし、誰かが代表して喋つてくれれば楽なのに……。

そう考へていると男達は何を勘違いしたのか声を上げて笑い、内一人がにやりと品のない笑みを浮かべて言つ。

「くくく、氣丈な女もこう言つと大抵あんたみたいな反応すんだよ
ね」

「ベッドの上じゅ、いこいで啼くせにな」

「俺たち結構良心的なんだぜ？ 身体で払ってくれれば万引きも見逃すつてこつてんだよ？」

「だからお前、△△の見すぎだつてのー もやもやはなはなつー」

「おーい！ 後ろのねーちゃんも隠れてないでひょんと顔見せてみるよ」

ふるふると震えていた蓮の身体がビクリとして、私の手を握る力が一層強くなつた。

多分、一度見捨てられたことで大きなトラウマが出来ているんだろううと思つ。

あー、ここから早く消えてくれないかな……。

ダメだ、イライラしてきた。

「おい、シカトかよ、いいからこっち向けて、大体お前みたいにビクビクしてる奴に限って淫乱なんだよな」

そう言いつつ、私たちを囮みこむように近づいてくる男たち、その内の一人がその汚い手で蓮の細腕を掴もうとして、

「い、いやっ！」

「はいっ、捕ま、え、ツ！！」

ドサリ、その手は空を掴み、男はそのまま地面に崩れ落ちた。

*

私は怒っていた。

最初は話し合いで解決しようとも思つたが、何しろ口を挟む暇もない。

剥えただけならともかく蓮を貶めるような言葉をペラペラと。

だから男の一人が蓮に触ろうと手を伸ばしたとき、私が前もって地面に転がしておいた弾丸をその男の顎を目がけ思いつきり直撃させたとしても仕方のないことだらう。

それにもしても、顎つて本当に急所なんだ。

あの人、操り人形みたいに崩れ落ちたけどまさか死んでないよね。

「お、おい、大丈夫か！？」

「き、氣を失つてる……」

男のお仲間たちが突然のことにござわざわと騒ぎ始める。良かつた、死んでないっぽい。

だったらこれくらいの力加減で大丈夫か。

「てめ！ 何しゃがつた！？」

「さあ……なんだろう、ねつ！」

更に一発、また一発と、仕掛けた爆弾を次々に起爆させていく。その度に皆同じように自分の股間に押さえ悶絶。急所は何も顎だけではないのだ。

更には、今回は相手が人間である以上弾丸^{ビー玉}も使い回しが効くため、私の魔力が尽きるまでは永遠と続けられる。

ワンコが異常に硬かつただけで、人間ぐらいだつたらビー玉でも十分な致命傷は与えられるのだ。

「ちょ、何だこれ おうつ！…」

「は？ は？ なに！？ どうなつてん のおぼう！…」

「お、おま、お前 んうつ！… じじよおお…お、俺、一発目…

…」

「死ぬ、死ぬう！」

「ふふふ、ねえどうする？ 素直に謝るんだつたら、再起不能にだけはないであげてもいつかなーと思つてるんだけど。正直、生きるか死ぬかの戦闘の後だとあんたらなんて児戯にも等しいし」

ある物は地をのた打ち回り、またある物はピヨンピヨンと不恰好に飛び跳ねている。

皆共通して股間をしつかりと押さえているものだから面白い。ふと、蓮のほうを見てみると急に奇妙な行動をした男達を呆然とした顔で眺めていた。

「ぐ、誰がてめえに！」

「えい！」

「んほりつ……」

*

「すみませんでしたっ……」

数分後、そこには土下座して謝る不良どもがずらりと陳列した姿があつた。

私はそいつらを見下すように立ち、上から不良どもを見下ろしている。

蓮も私の手を握り、恐る恐るひれ伏す不良をつかがっている。

「もうしない？」

「はい、誓つてもうこんな」とせしませんっ……」

「じゃあ、とりあえず蓮に謝つて」

「蓮さんつ！ 本当にすみませんでしたつ……！」

「ふえつ？ あ、あの……」

一 残念……許してもらえないみたい

私が再度ヒー玉をちらつかせると男達が一斉に轟也める。

「そ、そんなつー？ 姉さんー。」

姫さん言ひな！

卷之三

「わー！」
凛音ちゃんもええよ！
ニセにはせんじてへんよ

「……そう、分かった、蓮がそう言うならもうしない……良かったね？　蓮の心が広くて。感謝しきなさい」

蓮ちゃんッ!! ほんとアホみたいじゃねーか!!

!

「あんたらの変わり身の速さにほいつそ感心するわ」

「褒めてないから。あと最低ね」

「あいつがどうぞこまかう……。」

「だから、褒めてなこつての、なに? ふざけんの?」

「ヒイイイイシ……。」

「ワンパターンか!」

「凛音やんつ落ち着いて!」

はつ!

いかんいかん、なんかこいつらの雰囲気に乗せられたわ。

「「」せん、あー、それで? 本当に反省してる?」

「反省しますつ……。」

「せつか……といひついにあつたはずの果物の詰めなんだかど、どこにあるか知らなー?」

「し、知つま」

「チラニ」

「よく存じ上げてありますつー。」

「だよね。で? あんたら豆嫌いなの? まだにっぽい残ってるナ

「え？」

「えー… 後で食べようと残しておいただけですっ…。自分ら、好きなものは最後に取つておく感じッスから。豆、大好きッス！」

「へ。だったら他のものは私たちが貰つてもかまわないよね？」

「ううそ、好きなだけお持ちください…！」

……はあ。

まあ、このへりこで許してやるとするか。
なんか、もうめんどくさい。

「分かった、じゃあもう顔上げていいよ」

「姐さ　凛姐さんっ…。」

「だから、誰が姐さんか…まあいいや、ほひ、早く立ちなさい。
もつ何もしないから」

「

「ちょっと聞いてんの？」

「へ…。あ、え…。もうひとつだけ一件事したいかな
あと」

「なに？ 足でも痺れてるの？」

「え、その…」

何こいつら、そんなに土下座が好きなわけ？

わざわざからもぞもぞしてるし、拳動不審だし。

と、なんとなく不良たちの視線を追つた先には、膝丈のスカートからすらりと伸びた蓮の綺麗な足があつた。

スカートはスリット状に破れており、それを一層なまめかしく見せている。

そして不良たちの視点からはその中まで、見えて。

「キャッ！」

私よりも、一瞬先に不良たちの視線に気づいた蓮が顔を真っ赤にしてスカートを押さえ、私の背中にしがみついた。

私は自分のこめかみがピクリと動ぐのを感じる。

「はあ……全く反省してないみたいだね……お姉さん残念だよ……」

にっこりと笑いかける。

「ヒイイイイッ！……いや、違うんですけど……これは、そのつ

「これは？ 何かな？」

「蓮さん……」

「ふえ、は、はい……」

「あっがとうございましたっ……」

その後、數十分にわたって、彼らの絶叫が響き渡った。

#09 休憩してみよう

最初は、もう少し人がいたらしい。

バケモノが現れ、この食料品売り場にも少なからずの避難者が集まつた。

異変が起ころり始めたのは、その直ぐ後だつたと言つ。

*

「消えた？」

私は不良たちに鉄槌を喰らわしたあと、詳しい事情を聞くために不良たちがここ最近立てこもつてていると言う店の従業員専用の小部屋のようなところに集まつていた。少々タバコ臭いが灯油ストーブも設置されておりそこに快適だ。

蓮が少々怯えていたが、暖かい環境にそれなりの食糧も揃つているため身体を休ませるには丁度いいだろう。

私は蓮と一緒にソファへと腰掛けると桃の缶詰を開けて、蓮に食べさせてやる。

嬉しそうに微笑む蓮。

不良連中は床に正座である。

「はい、その、俺らと一緒にいた中年の親父なんですけど、急に倒れたと思つたら、身体がどんどん石みたいになつていつて……」

と、不良リーダー 葉山といふひじいが特に興味はない が
言つ。

「アレ、マジでわかつたよな?」

「ナリナリ、おひさんのおひさんのか想像とかまじ勘弁だし」

「はいはい、それで?」

蓮に食べさせてやりながら、自分でも食べてみる。
実際に2田ぶりの食事だ。

桃の甘みと水分が私の身体を潤していく。

「はい、それで、なんか気持ち悪くなつて、そのまま放置してたんですね」

「はい、蓮、あ～ん」

「でも、俺らも鬼じゃないんで、次の日はおひさんができる
のか見にいったんですけど」

「蓮、おこしい?」

「うふ、おこしいよ。凛音ちゃんも

「ん、あ～ん」

は～、蓮に食べさせてもらひつと八割り増しひこに美味しいなあ。

「……姉さん、聞いてます?」

「んぐんぐ～む? ひこいつよ。……っ、それで、見に行つてみた
ら綺麗わつぱりだつた、と」

「あ、はい。……それと噂なんですけど、もつ地球にほとんど人が残つていないとか」

「へ～、あつ、そこの人、お茶入れてくれる？」

「は、はいっ、姉さん、今すぐ」

「二人分ね～」

「心得ています！」

私は、厳つい顔をした不良の一人が灯油ストーブの上に置いてあつたヤカンを取り、いそいそと急須にお湯を注ぐのをぼんやりと眺める。

私がここに来るまで人に全く出会わなかつた理由、それが例の病気のせいだとしたら私たちも安心していられない。

世界中で発生しているわけだし空気感染するのかな。情報だと10～20代には被害者がほとんどいなかつたはず、つまりその年代には例の病気に対する何らかの抗体が 。

「姉さん、お待たせしま、熱つー！　あつ！」

手を滑らせた不良の手から、湯飲みがその中身を撒き散らしながら落下する。

しかし、それがそのまま床にぶちまけられることはなかつた。湯飲みとその中身、その周辺だけが時間が止まつたよつピタリと静止している。

そのハイスピードカメラのワンシーンのような状況に、私以外の人間もまた固まるようにして見入っていた。

「つたく、気をつけなさいよ？ 蓮が火傷やけどでもしたらどうすんのよ」
私はそう言いながら宙に飛び散ったお茶を全て湯飲みの中へと移動させると、そのまま湯飲みごと落とした不良につき返す。ふわふわと宙に浮く湯飲みに困惑しながらも不良は湯飲みを受け取つた。

「もう一度お願ねいね？」

私は笑いかけながらそう言った。

*

私はいれなおしてもらつたお茶を啜り、ふう、とため息を吐いた。と、不良リーダーが静寂を破つて話しかけてくる。

「姐さん、超能力者だつたんですね」

そして、次々に、

「姐さん、ぱねえッス！」

「か、かっけー……」

「つか、マジかよ」

なに、何でここにこんなに驚いてるわけ？

ちゅうと前に散々見せてやつたはずなんだけど」とこりか。

「超能力者じゃなくて魔法使い。分かる?」の違い

「え? いや、よく分からぬいッスけど」

「なんか違うんすか?」

「はあ……あんたら、『み膚以下ね、いつそ死ねばいい』

「ええ!?!? そこまでツスカ!?!?」

私はお茶を半分ほど飲み、湯飲みをテーブルに置いた。そして、隣で両手を使ってお茶を飲む蓮の太股に、ゆっくりと自分の頭を預ける。

「わつ、凛音ちゃん、あぶないよ?」

「ん~……ちゅうひとだけ」

はあ、柔らかい。

蓮が「凛音ちゃん、眠たいん?」とふんわりとした声で聞いてくる。やばいな、ほんとのまま寝ちゃいそう。

「あの~姐さん?」

「あ、そりそり、その超能力者についてだけど、なにか知ってる?」

蓮の太股を頬で堪能しながら、不良たちに問い合わせた。

お茶を飲み終わった蓮が私の頭に手を添えて優しく撫でてくれる。蓮の細くて纖細な指の感触がたまらなく気持ちいい。

「い、いえ、そっちも噂程度で、実際見たのは姉さんが初めてです、マジビビりました」

「そう……」

誰にでも使えるわけじゃないのか。

それとも、ただ自覚ができるいないだけなのか。

「つべえ！ 興奮してきたわ！」

「姉さん！ 僕らにも使えないんすか！？」

「ん……私からは何とも……なんかこう、体のどつかにもやもやとしたチカラを感じたりしない？」

「チカラっすか？ いえ、特には

「ふうん。蓮は？ なにか感じない？」

顔を上に向け、二つの胸の向こうに見える蓮に訊ねる。私の顔を覗き込むようにしていた蓮と田中が合った。

「ふえっ？ あ、えっと、その、ウチも、よーわからへん、ごめんな？」

何故か顔を真っ赤にしてあたふたしている。かーい!

「そうですか、つまり、そのチカラを直観できれば俺たちにも可能性はあるってことですか？」

「へ？ あ、うん……知らないけど」

私がボソリと呟いたのは聞こえなかつたようだ。

不良たちは目を爛々と輝かせ、自分に一体どんなチカラが宿つているのか。といつたことで盛り上がりだした。
まあ、勝手にしてくれたまえ。

「っしー 分かりました姐さん！ 僕ら精進することにするッス！」

「うん、がんばってね、あと、今から少し寝るからしばらく出てもらえる？」

「分かりました姐さん！ 見張りは俺らに任せてくれさいー！」

「うん、ありがと」

バタン、ヒ音をたてて小部屋の扉が閉められた。
扉の外から聞こえる不良たちの笑い声が遠ざかっていく。

私は扉についている内鍵を魔法で回した。

#009 休憩してみよう（後書き）

不良リーダー（葉山さん）：それなりに常識人
不良A：影薄い
不良B：AVが好き
不良C：怖い顔
不良D：すんごい元気

田が覚めると田の前に天使がいた。

*

私は、すやすやと寝息を立てて眠る蓮を起こさないソファから起きあがると、蓮の細い腰に手を回してソファーに倒して楽な体勢にしてやる。

あれからずつと私に膝枕をしてくれていたよしだ。

ふと自分の腕時計を見ると、もう夜の七時を過ぎていてひだり三時間近く眠っていたのか……。

冬の七時の空は暗い。

この部屋も、灯油ストーブから見える仄かな明かりがぼんやりと光っているだけで、ストーブの火のボウッと燃える音とその上に置かれた古びたヤカンがボコボコと沸騰する音以外は、蓮の寝息がかさに聞こえるだけだった。

その驚くほど静寂な空間に何故か心が安らいだ。

私はストーブを取り、簡易台所の蛇口から水を加え直すと　ここ　の水道はまだ生きているようだ　再度ストーブの上に置きなおした。

「……んつ、凜音ちゃん？」

と、その音で田を覚ましたのか、蓮がソファーからぬづくと体

を起^ハし、田の端を袖で擦りながら私の名前を呼んだ。

「蓮、『めんね、起^ハじちゃつた』

「ううん、ええんよ……凜音ちゃん、何^シとるん?」

私に気づいた蓮が安心したように微笑みを浮かべ、立ったままストームに手を当てていた私の側へ近づき、私の隣に立つた。ふわりと、やわらかで優しい香りが漂つ。

「うーん、特に何も、私も今起きたから……ふふっ、蓮の膝枕氣持ちよかつたよ?」

「そ、そ、うなんや……えへへ、実はウチもよくおばあちゃんにしてもらつてたんよ」

「そつか、じゃ、また今度してもらおつかな」

「あ、その、凜音ちゃんがして欲しいなら、ウチはいつでも……」

なんでもないような会話が実に心地いい。

夜の静けさと部屋の雰囲気も相まって、まるで世界に一人だけが取り残されたかのような不思議な錯覚を覚えた。もっとも実際にそれに近い状況ではあるんだろうが。

「あつ」

その時、蓮が一つだけ付いた髪を指して小さな声をあげた。

「ん?」

「雪」

「お、ほんとだ」

雪なんて久しぶりに見たな。

そういえば、いつに来てからはじめてのやつな気がする。

「ホワイトクリスマスやね」

「は？」

蓮が振り返つてこいつと並んで、舞い落ちる雪をぽんやりと眺めていた私は、思わず間抜けな声を漏らしてしまった。

え、ちょっと待って、えっと、最初の日が一〇日だったから……一、二、三……あ。

「忘れてた。あー、蓮とはまもとけやんとしたクリスマスを過ぎせねばよかつたんだけど……『めぐね？ 気の利いたプレゼントもなぐく』

買ひにいける状況でもないしなあ。
私、今何か持つてたっけ……。

と、そんなことを思つてこいつと並んで、頬に柔らかくて暖かな感触を覚えた。

しかし、こつまでも味わつていたような、湯けるような感触は直ぐに消え、代わりに顔を真っ赤にして俯いた蓮が言った。

「そ、その、えと……こんな状況でこんなこと言つのも変なんやけ

「……ウチ、凛音ちゃんをお友達になれて本当に嬉しくて……や、やから、ウチは、えと……今日凛音ちゃんと知り合えただけで最高のプレゼントをもらひましたん、よ?」

……えへと?

あ、これは、あれか。抱きしめればいいのか? 抱きしめてチューすればいいのか!?

ていうか、なんだこの可愛すぎる生物はっ!

私はこんな可愛い子に恋してた覚えはありませんわよっー!?

私が身悶えしていると、蓮が不安げに私を見て、

「り、凛音、ちゃん? ……その、嫌やつた? や、やつた!」「めんな、ウチ変なこと言つ ふわ」

語尾がどんどん小さくなるつ、声が小さく震える。

仕方ないので、蓮をこちらに引き寄せ、ぎゅうっと抱きしめておいた。

小柄で線の細い蓮が私の腕の中によつぱりと収まる。

「全然嫌なんかじゃないよ? 私も蓮と友達になれて凄く嬉しい。今年は、まあ、こんな感じのクリスマスになっちゃったけど、また来年も、そのまた次だつてあるんだしさ、その時は今日よりもっと素敵なクリスマスを過ごさうつ、……ね?」

「凛音ちゃん……うそ

「だから、今回ほんなもので我慢してね?」

抱きしめた蓮の首に両手を回して、私がいつも身につけているドッグタグを付けてやる。

蓮の顔が目と鼻の先にあり、少し距離を詰めるだけで簡単にキスができるそうだ。

「あつ」

蓮が自分の首から下がっている銀色のプレートを見て、小さく声をあげた。

「お友達記念。私の名前と血液型が入ってるんだけど……要らない？」

蓮が頭を取れそうな勢いで横に振る。

「……でも、ええの？」

「うふ、そんなものでよければ」

「ううん、嬉しい……おおきに凛音ちゃん」

「どういたしまして」

「どうせ、喜んでもらえたみたいで一安心だ。

そう思つてみると、蓮は自分の髪から先端に綺麗なガラス球の付いたヘアピンを抜き取り、スッと私の髪へと付けてくれた。

「お返しや」と、恥ずかしそうに笑う蓮が可愛いくて、私は蓮の前

髪をサツと払つて、おでこに触れるだけの口付けをした。

「蓮、これからもよろしくね？」

「凛音ちゃん……」

ストーブの仄かな灯りに照りられて、じぞうへの間見つめあつ。

ぐうう―――。

「……今の」

「あ、あ、その……」

わたわたと慌てる蓮。

私は蓮から離れ、軽く頭を撫でながら言った。

「（）飯でも作ろつか？　お友達記念兼クリスマスってことでなんか豪華なものにしよう」

そのあとは、蓮にも手伝つてもらつて鍋料理を作った。

野菜類はいいとして、肉類もまだ使えそうなものが多く、かなり本格的なものが出来上がった。

少し量が多くなりすぎたため、不良とも仲間に入れてあげると泣いて喜んでいた。

とこうか、本当に今まで見張りをしていたらしく。「苦労な」と。

#10 Present For You(後書き)

KOISAKI
RINNE
BLOOD TYPE AB

#1-1 られかくじゅうじゆう (縦書き)

で、でも……た。(ガクツ)

「寒気がやさ……寒気がやん」

ん……。

「寒気がやん、朝」はんできたよ。一緒に食べよ~。」

寒……あと五分……。

「…………うわ」

……。

ん？ 今何か……。

頬に何か生暖かいものを感じ、重たい田蓋たぶたをつづらと開ける。
知らない天井……私を覗き込みにつこつと笑う美少女びじゅ蓮。
朝の冷たい空氣と一緒に、卵焼きのいこにおこが私の鼻腔びきょうをくすぐった。

これが、今日の始まり。

*

「ん、おこしー」

テーブルに並べられたお皿には綺麗な色をした卵焼きが載っている。

一つ食べてみると、だしの甘みがほんのつとあっていて凄くおいしかった。

なんと朝(じ)はんは蓮が早く起きて手作りしてくれたよつで、いつも朝を抜く私も喜ばざるを得ない。

もう一生嫁にはやらなこどおこう。

「わうか？ えへへ、昨日の鍋の残りで味噌汁も作ってみたんよ？」

私の隣に腰掛けた蓮に味噌汁の入ったお椀を手渡される。見える具材だけで、大根、白菜、豆腐、じぼつ、肉団子。

あ、朝から豪勢だな。

どれどれ……ズズッ つまつー

「え、えいやん」

蓮が感想を聞いてくる。

「凄くおいしい。いつも朝は何も食べないんだけど……蓮の料理だったら毎朝でも食べたいくらい」

「もお、凛音(れいおん)さんはお世辞がつまいなあ。でも朝はりやんと食べなあかんよ?」

「お世辞じゃないよ。まあ私はちょい低血圧(ぎっけつう)だから食べる時間がないってのもあるんだけどね……」

私は、味噌汁を啜りながら今日のことを考えて考える。

とは言え、選択肢は大きく一つ。

ここに留まるか、ここを出るか、だ。

前者の場合は、うまくいけばあと一ヶ月以上はそれなりに生活できるはずだ。それだけの食料の蓄えがここにはある。

しかし、それは私たちだけで、と言う意味だ。

生存者たちが食料などを求めてこのショッピングモールの食料品売り場に駆け込んでくるのは時間の問題だろう。

そして、おそらくその時は激しい食料の奪い合いが始まり、はては殺し合いにも発展しかねない。

この状況 多くの人間が消失し、外には凶暴なバケモノが闊歩している なら十分にあり得ることだ。
まあ、現に私も襲われたわけだし。

後者の場合は、ここを出た後どこに向かうか、だ。

候補としては、私の家。

元々はただの食料調達に来ただけなんだからこれも大いにアリだ。
それから、学校が現在どうなっているのか知つておきたい。

私は曲がりなりにも生徒会長であるわけだし、一応友達もいることだし。

そういうば、あいつ大丈夫かなあ。
死んでないといいけど……。

「蓮はこの後どうしたい？ もし家に帰りたかつたら私が連れてつてあげるよ？」

私は思考を手放すと、蓮にも意見を仰いだ。

今まで何も言つてなかつたが、この子も自分の家に帰りたいのかもしない。

私の都合で振り回すのも、気がひけた。

「え？ その…… ウチは……」

「うそ？」

「一人暮らしやから家はええよ…… それより凛音ちゃんは家族のことを心配やないの？」

蓮は家族のことがあまり聞いて欲しくないようすで、明らかに話を変えてくる。
なので私もそれ以上は触れないことにした。

「私はいーの。心配は心配なんだけど、まあ見えない相手を心配するよりはまず自分の心配しないとね」

「…………り、凛音ちゃん」

「ん？」

「ウチ、これからも凛音ちゃんと一緒に暮らしたいもん？」

おずおずと話しかけてきたかと思つたら、やんなことひと言ついてくる。
ちくしょい可愛いな。

私はにやける顔を蓮の頭を撫でる」と何とか誤魔化しつつ、

「いいよ、むしろ一生ここでほっこり暮らす

「そ、そんな」と言われるとい一生凛音ちゃんから離れられなく

なつそうやわ……」

むしろ、一生いくださー。

頬を染めてそんなことを言つゝ蓮を見て、そつ思わずにはいられなかつた。

*

朝ごはんを食べ終わり、現時刻、八時三十分。

考えた結果、もうしばらへはにこに留まつて様子を見ようといつ結論に至つた。

そうと決まれば、行動は早いほうがいい。

幸いここは多くの専門店が集まるショッピングモール、生活物資の調達には持つて来いだ。

拠点も、この部屋で問題ない。

トイレの位置も近いし、まだ水も出る。なにより、豊富な食料が直ぐ近くにあるのだ。

しかし、問題もある。

一つは暖房。

この、店員の休憩室のような部屋には、一つの灯油ストーブと、灯油用のポリタンクが三つ置かれていた。が、ストーブの灯油残量を見ると針がEエンドティポリタンクのうち二つはもう空だった。

この季節、あと一つのストックだけでは心もとない、といつか明らかにもたない。

早急な灯油、そして布団などの確保が必要だろう。

んで一つ田がね、お風呂の問題。

休憩室といつてもお風呂まで完備されてはいるはずはなかつた。
いくら冬で汗もかかないとは言え、女の子がお風呂に入れないということ
うのは拷問にも等しい。

それに、体を清潔にするというのは、精神面でもかなり重要なこと
のように思える。

大きな桶おけかなにかがあればお風呂の代わりにはなりそつなんだけ
……。

私は必要だと思われる品を次々にペックアップしていった。

#1-1 わからぬじよひ（後書き）

違うんだ！ なんかこう、カツコイイ能力バトルが描きたいんだよ。味噌汁とかど～でもい～つ～の。

#1-2 色々と體達じよつ

私たちは、ショッピングモールの中にあるホームセンターのようなところに来ている。

ここなら生活用品の大抵は揃っているだらうことで荷物もちを引き連れてやつてきたのだ。

建物の中にもバケモノがいる可能性だって十分に考えられたため、ここまで來るのもかなりの注意を払う必要があった。

ちなみにいつどんなことが起こるか分からぬいため、蓮は部屋に残してきた。

置いていかれるのが不安なのか、上目遣いで連れて行つてとお願いする蓮に危うく折れそうにもなつたが、何とか自制することができた。

帰つたら、思う存分愛^めでてやろう。

私はカイロの袋を何個かショッピングカートに入れる。

現在カートには、石鹼や歯ブラシ、毛布など、生活必需品がつづたかく積まれている。

「えーと……次は

「姐、さんっ！」

私が必要なもののリストを見て、次のものを探していると、不良リーダーから声が掛かつた。

やけに、ひび、踏ん張つてる感じの声だ。

「なに？ なんかあつた？」

「！」 れつ！ 見てくだ、せいっ！」

振り向いた先にあつたのは、五右衛門風呂おうべふろと思しき物体を五人がかりで運ぶ不良たちの姿だった。

*

「ズンッ！」 と音をたてて床に下ろされた物体は見れば見るほど五右衛門風呂で、下方には薪を燃やすかまどが付いており、上に排煙するための煙突がそびえている。

うん、五右衛門風呂だ。紛れもないな。

「あんたら……これどっから持つてきたの？」

私は呆れたような視線を不良たちと五右衛門風呂に向ける。しかし、よくこんなものがあつたな。

「向こうのほうにありました！」

「どうスか、これっ！」

「どうって言われて……こんなもの室内じゃ使えないし……」

私は一瞬、戻ってきて、と言いかけ、待てよ？ と思ひとどまる。

部屋の半分くらいをお風呂用に区切つて、床にビニールシートを張つてから、レンガ何かを土台にしてしっかりと固定すれば。

それから大きなアルミダストを煙突の先に取り付けて、動かない換気扇は取り外して直接外に排煙すれば……。

うん！ なんかいけそうな気がする。

やつてやれないことはない、とにかくその案を試してみることにしよう。

だめだつたらだめだつたでいいんだし。

それにもし出来たら、蓮と一緒に……。

うん、なんとしても完成させなけばっ！

「てなわけで、あんたらでつかいアルミダスト探してきて！ 多分どつかにあるはずだから」

「どんなわけッスか！？ あと、アルミダストってなんすか！？」

「あー、なんといつかアルミで出来たでつかいホースみたいやつ、この煙突を延長したいんだけど……分かる？」

「あー、はいっ！ 了解しましたっ！ 全身全靈をもつてアルミダスト、探しでまいります」

「そう言って一斉に散らばっていく五人。ほんとよく働く連中だ。

さて、私はお風呂の取り付けに必要そつなものを探すか……えっと、まずは

*

部屋を分けるカーテン、煙突とアルミダストを繋げるためのテープなどを手際よくカートに入れ、私は工具のコーナーにやってきた。こうじう店はあまり入ることがないため、工具がサイズ別にすらりと並べられている様を見ると訳もなく興奮してしまつ。宝探しをしているような心情かもしれない。

「おひ、ドライバー発見つ」

あつ、でもどれ持つていけばいいんだろう……。

うへ、よく分かんないし、サイズは適当に持つてつとくか。

私がドライバーを見比べていると、ダッダッダッ、っと誰かが走る足音が聞こえた。

私の体が一瞬ピクつく。

「姐さんッ！…」

なんだお前か、店内を走るなガキか。つかあんたらは喋るのにいちいち大声を出さないと気がすまないのか全く。

私は背を向けたままため息をついた。

「姐さんッ！…逃げてください…」

「え？」

「オーンー！」

そんな効果音がしそうなほど音をたてて、私の直ぐ後ろの商品棚が吹き飛んだ。

サイズごとに並べられていたネジや釘が散乱し、それらを踏みしめ

る陰が一つ。

茶黒い体毛に鋭く尖つた爪、ピンと伸びた耳、涎を滴らせ大きな牙
を覗かせる口。

「グルルルルル」

白濁した瞳が私を貫いた。

またお前が

と、私がうんざりしていると、ザツと私の前に立ちはだかる人影。ドライバーを探していた体勢のまま見上げる。

私服のため学生かどうかは分からぬが多分私と同年代、もしくは
一つ年下くらいの女の子。

茶髪シミートボブの美人さんで薄紫のフレアスカートからのひる生足がまぶしい。

その茶髪ボブは私を一瞥すると、

「ちくわ」

と、舌打ちした。

へつぢやー?

あ、いや、そんなこと書いてる場合じゃなかった！

く逃げてーーー！

「ヤバい貴女！ あなたから逃げてくださいこいつーーー！」

それ、私のセツフなんですかどうーーー？

私はフウとため息を吐いた後、やるしかないか。と覚悟を決める。
今度ばかりはやられるわけにはいかない。

私が死んだら蓮が泣く。

私は咄嗟にワソノコを迎撃するための武器がないあたりを見渡した。

あつた。

私がソレを手に取り、攻撃態勢に移ろうと体を起こしたときにはワソノコの爪が私の田前まで迫っていた。

あ。

私が思つたのはそれだけ。

そして私の田の前が真っ白になつた。

#1-2 色々で體達しよう（後編）

新キャラです。

一秒で生まれました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343z/>

目が覚めたら世界が終わってた

2011年12月27日23時45分発行